

女性（40代）禁煙年齢・20代

二十二、三才から煙草をふかし始めた。十代から、当時アングラと呼ばれていた小劇団に出入りしていた。舞台に立ちたいと思った事はなかったけれど、演劇論、俳優論、文学論みたいなものを熱く交わす、大学生崩れの男女の話は、耳をダンボにして聞き入った。誰もが、どちらかと言えば細身で、煙たそうに目をしかめて、青や白の煙を、もわもわとくゆらせていた。

（雰囲気あるなぁ）

洗い晒しのGパンに、よれよれのTシャツもカッコいい。Yシャツにネクタイのサラリーマンなんて、汗臭くてやぼったくてサイテー。体が丈夫ではなかったから、解禁年齢の二、三年後、むせたり咳き込んだりを日々克服し、晴れて煙草をくゆらす女となった。本数が月毎に激増し、銘柄もセブンスター、マイルドセブン、セーラムあたりを歩きつ戻りつ、一番カッコ良さ気なセーラムに落ち着いき、二十五、六才で喫煙娘。勤め先の塾の団樂会、正面の柱に大鏡があったせいで、真っ白なもやに包まれ、一人だけ姿がぼやけているのが分かった。

「ほや、まあー！」

周りの人も平気だった時代。女性喫煙者は増え続けていた。童顔だから煙草を取り出すと、

「えーっ！吸うんですか？」

意外性の女はカッコいいと、思い込んでいた。

突然見事にやめたきっかけは、マザーテレサの来日。講演を聞いて、無償でひたすら奉仕する、輝かしくも恐れ多い聖女風ではなくて、お茶目で気さくで可愛い人と言う印象に魅了された。

インドへ、ボランティアに行こう！

旅費、滞在費をどこから捻出するか。それなりの給料をとっていたのに、貯金がない。好きな映画を毎週見る以外は、地味な暮らし。デート代は、男が払う時代。

家計簿を試しにつけてみた。

セーラムを一日に二、三箱。

煙草用歯磨き粉、月に二箱。

煙草の臭い消し、マウス、ヘア、ボディ用シャンプーだって毎朝、傷むからヘアケア用品も多々、洗濯も入念、レースなんてすぐ買い替え、薄化粧の化粧品代より圧倒的に煙草とその臭い消し代に遣い込んでいた。

(アホくさー！)

気になる臭いの元を、やめればよい。

一月でやめられたのは、ファッションで始めたのと、根がケチなせい。

セーラムなんか一本ふかすと 円！

国産のマイルドセブンへ、ニコチン含有量の低い物へと日々下げ、ふかしていたせいかニコチン欠乏症状は、大して出なかった。

昭和六十年頃、月々数万円浮かせて休職、インドで九ヶ月、マザーテレサの建てた施設で働いた

飢えて路上で夜間凍死していく人の絶えない国に居ると、日本では、痩せたくて煙草を吸い始める女性が多い事を、無神経で傲慢で残酷だと感じた。

精神的に、二度と煙草をふかせない女となって日本へ戻った。

最初のインドの旅からずっと、自分にも家族にも友人にも、害を与えると知りつつ吸い続けるのは、飢えた人々のまん中で一人、平然とおいしい物を、にんまり食べている姿に重なってしまう。